

## 英国のシビクトラスト (Civic Trust)

井手久登

最近、新聞紙上において、まちづくり運動に関連してシビクトラストという名を目にされた人も多いであろう。しかし、ナショナルトラストに比べて、その知名度はずっと低いし、またその実態が十分に把握されないまま、勝手な解釈がされていることも多い。偶々14年前(1976年)にシビクトラストの啓蒙書「プライド・オブ・プレイス」を訳した縁で若干の説明をしておきたい。

シビクトラスト(CT)は歴史的に価値のある建造物の保存、田園美の保護、居住環境の改善等を目的に1957年、時の住宅地方大臣であった、ダンカン・サンズDuncan Sandys氏によって設立された、民間団体(Independent Charity)である。イングランド東北部、北西部、ウェールズ、スコットランドの4地域にAssociate Trustがあり、その各代表者はCTの理事会構成員になっている。全体基本方針は理事会で決められているが、日常的業務は約30人のスタッフで運営されている。主な活動は上記の課題について一般の人々の関心を高め、市民としての誇りを鼓舞することであった。そして各地で行われている環境保全活動のうちからすぐれたものを選んで、シビクトラスト賞を出している。対象はデザイン的にすぐれたもの、周辺環境の向上に役立ったもの、居住環境改善事業の3カテゴリーに分かれる。

CTの運営は企業等からの寄付を中心としていて営まれていて、個人会員がないのが特徴であったが、昨年(1989)からは個人会員制度も発足した。ナショナルトラストが、資産の保有管理を中心に個人会員制を基礎として進められてきたことと比べ、活動面でも異なった特徴をもっている。

まずCTの活動の出発となった事業は街路美化、清掃、植樹といった比較的身近な事柄である。このことは環境保全はまず住民一人一人が身近な環境を改善していくことから始まるという認識が背景にあることを示している。ここに民間主導的な環境保全運動の英国の基本姿勢を見ることが出来る。国、自治体はそれらの地域環境保全団体を支援する形が好ましいのである。

またCTに限らず英国の市民団体では若者のボランティア活動が活発である。ボランティア精神は人々が心構えとして身近な居住環境に自発的に責任を持ち、協力し合うとする表われである。その結果、CTがモットーとしている郷土への愛着Pride of placeが生まれ、維持されていくことになる。

一方、企業もその得た利益を社会的に還元することを義務と考えるならば、自らの経済活動に伴う環境変化に対して、資金を提供することによって責任の一端を受け持つことをするであろう。企業が利潤追求のみを目的とするのではなく、経済的利益は手段あるいは結果であるとするビューリタニズムが生きているのかもしれない。CTの法人会員には多くの企業が名を連ねてCT活動を資金面で援助しているのも特徴的である。

CTの運動の基本姿勢は、現状に不満、不平を言っている時間があったら、その時間を現実の中で肯定できる部分の評価、整備に費やそうということである。したがって単なるキャンペーンや、反対運動、圧力団体になるといったことは行わない。これは一面、保守的体質といえるが、極めて現実的な運動である。専門家の知識、技術を生かして、具体的な地域の改善計画をたて、実践を通して環境を改善していこうとするものである。これらの経験、事例を通して、多くの既存の地域環境保全団体local amenity societyに情報を提供し、助言を与え、これらの各組織のネットワーク形成に力を貸しているのである。その意味でCTは、各地のlocal amenity societyを指導、誘導するためにできた中央の団体であるという役割をも持っている。

翻って、わが国の地域的環境保全運動とCTを比較してみると、その思考、活動、資金等の各側面で彼我の相異が大きいことがわかる。これはもちろん、歴史的、精神的風土の違いにもよるところ大であるが、しかし、これを環境保全運動の発展段階の差と捉えて見直してみるのも意義があると思うが如何であろうか。